元気が出る、楽しめる文化財保存

―カナダでの体験から―

波多野　純

裁判所を研修所に

私の勤める大学が、ひょんなことからカナダの文化財を手に入れることになったのは一九九五年、阪神大震災の年。場所は、クロウズネストパスと言う名の、人口六五〇〇人の小さな町。冬季オリンピックが開かれたカルガリから南へ二五〇キロメートル、アメリカ国境に近く、カナディアン・ロッキーの東側にあたる。広々とした丘陵地帯に、かつては炭坑で栄えた集落が点在する。この町の中心街ブレアモアの町はずれに、一九二三年に建てられた裁判所兼警察署があった。その役目を終えた後も、アルバータ州の文化財に

指定され、町の文化財団が管理をし保育園や博物館として利用されてきた。しかし、財政的に維持が難しくなり、ベッド&ブレックファーストつまりペンションに売られそうになっていた。町の人たちの何人かが、町の歴史を見つめてきたシンボルが失われるのを心配し、教育的な施設として使ってみないかと誘ってくれた。

建物は、地下一階、地上二階、延べ一八〇坪。構造は、ホールブリックという煉瓦で作った穴あきのブロックを積み上げ、木造の屋根を掛けたもの。ホールブリックは一九二〇年代に流行した素材。一階に裁判所の法廷と警察署の事務室、二階に警察署長の住居と警察官の宿直室、地下には留置場と機械室がある。左右対称の外観は、落ちついた雰囲気を醸しだしている。入口の上には、アルバータ州の旗がデザインされている。

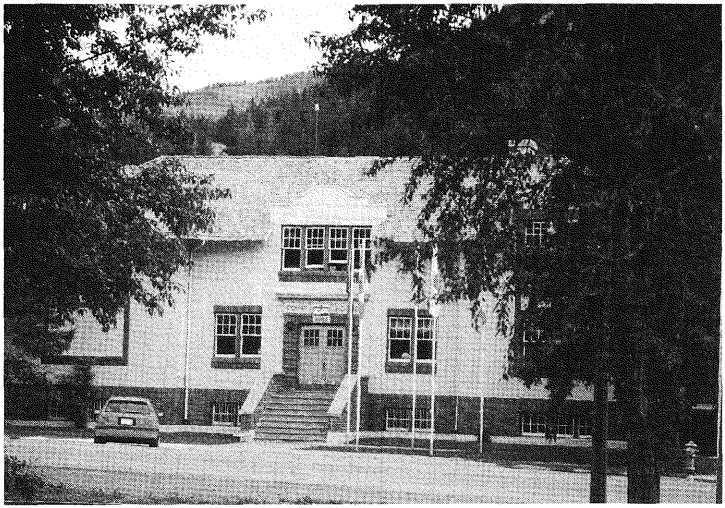
これを文化財として大切に保存しながら、大学の研修所として利用できるように改修することになった。

留学プログラム

付属の工業高校を卒業した学生が二〇人ほど、まずここで一年間の研修を積む。英語ばかりでなく、数学やコンピュータ、さらにアウトドアでの体験など豊富なプログラムが組みこまれている。これが終わると、一〇〇キロメートルほど離れたレスブリッジの短期大学へ進み卒業資格を得て、私たちの大学へ戻ってくる。カナダの大学へ進む学生もいる。海外で、ホームステイしながら自分の責任で生き抜いてくると、驚くほど逞しく大人になって帰ってくる。

元気が出る文化財保存施策

改修の方針は、アルバータ州歴史文化財団のリノ・バッソ氏、州が認めた修復建築家のロバート・ヒラノ氏、町の建設業者ケン・ソレンセン氏、研修所長フィ



▲改修なった日本工業大学カナダ研修所（ブレアモア・コートハウス）

ル・キャン氏そして大学から赴いた私たちが、繰り返し会議を開き、図面をやりとりして決定した。基本は、文化財としての価値を損なわないこと、火災の際に安全に避難できること、公共施設として車椅子等の利用者に不便を感じさせない設備を整えることなどである。

この議論のなかでびっくりしたのは、歴史文化財団いわばお役人であるリノ・バッソ氏の対応。いかに補助金を出せるか、積極的に提案してくれる。たとえば、当初は木のフローリングであった床の上に、現在はプラスチック系のタイルが貼ってある。すると、このタイルを剥がして床を磨き元の姿をよみがえらせると、仮に二〇〇ドル掛かるとする。いっぽう、このタイルの上にカーペットを貼ってまえば一五〇ドルで済む。しかし、前者を採用し木の床を復原すれば文化財修理にあたるので、州から半分の一〇〇ドルの補助がでるのでその分が戻ってくる。「どちらにしますか?」

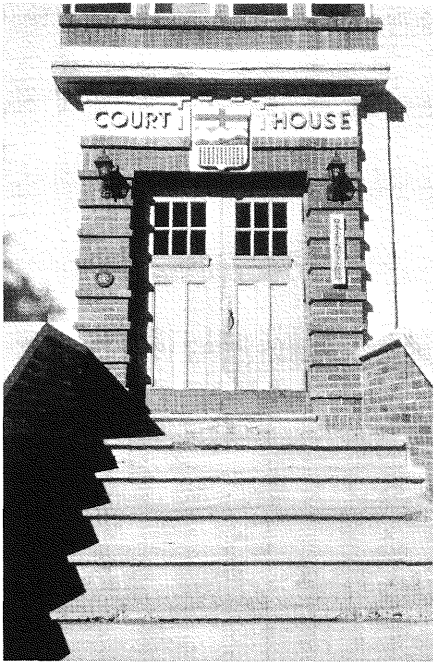
と私たちに判断を委ねてくれる。当然、前者を選ぶ。工事が始まると、タイル剥がしは単純労働だからと、高齢者福祉事業団の安い労働力を紹介してくれる。

この半額補助はとても良い方法だと思う。建物を修復しようとする所有者はまず二〇〇ドル支出しなければならない。しかし、半分戻ってくるのだから助かり、得をした気分になる。いっぽう、役所は援助した額の倍の経済効果がある。景気浮揚策として有効だと思う。

最近、日本では、規制緩和という言葉をたびたび耳にする。役所の任務は規制することにあり、それを少し弛めても上から規制しようとする姿勢には何ら変わりがない。規制緩和とは、上下関係を前提にした傲慢な言葉だと思う。カナダの発想はそれとまるで違う。文化財保存も市民的合意に基づくものであり、それを支えるのが政府であるとする姿勢は、日本的規制の対極にある。

君のおかげだ

マイナス四〇度を越す冬にも改修工事は続けられ、一九九六年六月一日に竣工式を迎えた。地元の中高校生のジャズコーラス、レスブリッジ日本人会の紅葉踊



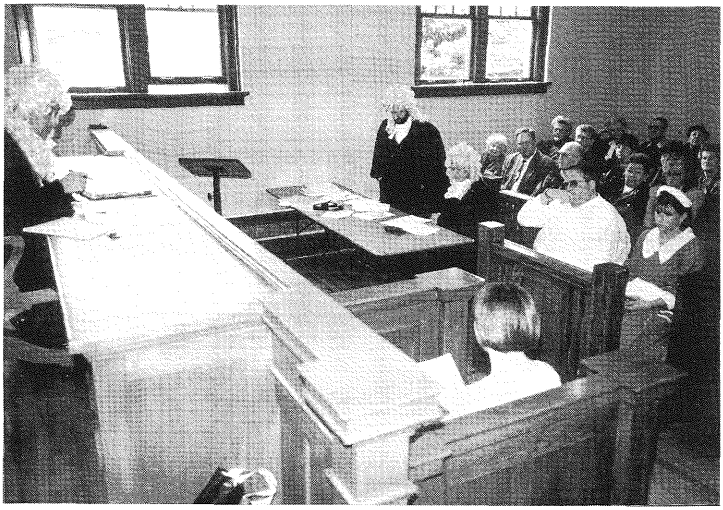
◀正面入口　アルバータ州のマークが見える

りなど楽しいイベントが繰り広げられ、ランチが振る舞われた。巨漢のリノ・バッソ氏は母親を連れてカルガリから駆けつけ、こんなに楽しい仕事はなかったと喜んでくれた。ロバート・ヒラノ氏の私へのプレゼントは、バット・マンのシールセット。ケン・ソレンセン氏は壇上から、職人さんたちひとりひとりの名を呼び、「君の塗ったペンキの色はすばらしい」、「君の作った手すりはびくともしない」と感謝の言葉を述べ、職人さんたちもそれに応えて手を振った。そして私を指さし、「文化財保存のあるべき姿を教えてくれた」と言われた時は、うれしいやら照れくさいやら。八人で合計四〇分間のスピーチが、あんなに楽しく退屈せず、予定通りの時間で終わるとは……。形式主義、偉い人へのゴマすりのスピーチを聞き飽きている身には、うらやましい限りである。

式典の後、法廷では一九三〇年頃の裁判が本物の裁判官を迎えて演じられた。馬車による町内ツアーも実施された。

災害と復興の博物館へ

一九〇一年、この町はフランクスライドと呼ばれる大規模な土砂崩れを体験している。石炭の掘り過ぎが原因らしく、集落がひとつ埋没し、たくさんの人が亡くなった。現在も樹木がまったく生えない岩だらけの崖が、その爪痕を示している。裁判所が完成したのは一九二三年、大正十二年、関東大震災の年である。そして、阪神大震災の年に大学はこの建物を手に入れた。私は、この建物の一部を、災害と復興に関する博物館にできればと思っている。



▲開所式での模擬裁判

公園にミニSLを

あれから三年経った昨年の秋、私たちは久しぶりにカナダを訪れ、ミニSLの駅舎を造ることになった。研修所長のフィル・キャン氏は、研修所とその学生が町にうまく溶け込めるよう、日々気を遣ってくれている。記念コインやバッチ、タオルやカーペットなど研修所をあしらったデザインのグッズもずいぶん増えた。

彼からこんな提案を受けた。研修所のすぐ後ろに、ギバス・パークと呼ばれる公園がある。ギバスとは、ボランティアとしてこの公園を長年管理してきたおじさんの名前。ギバスさんも高齢になり、公園の管理からは引退したが、今でも犬を連れて散歩にみえる。研修所の学生たちも、この公園でランチをとる。そこで、クロウズネストパスの町役場からこの公園を年間一ドル（形式だけ、つまり無料）で借用し、付属高校

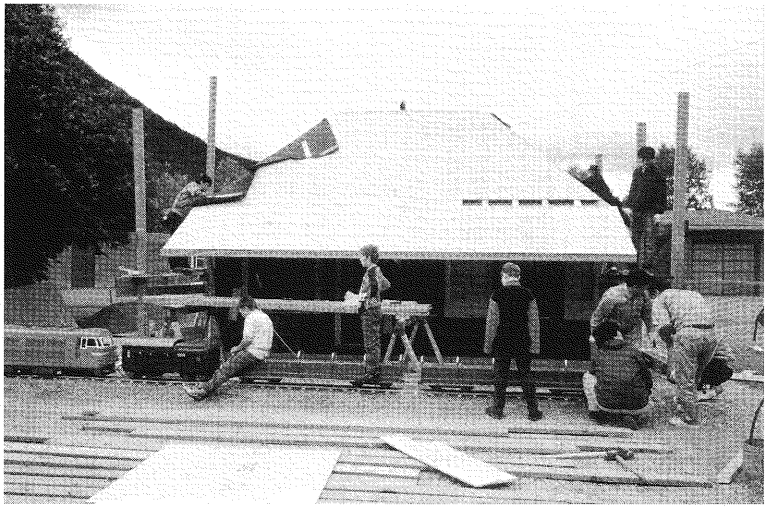
が製作したミニＳＬを走らせてみないかというのだ。付属高校では実習をかねて、ミニチュアの蒸気機関車やディーゼル機関車を製作し、全国各地の公園に提供している。世界ミニＳＬ大会を大学で開催したこともある。

駅舎を自分たちで建てる

鉄道の敷設は付属高校の先生たち、駅舎の建設を私たちが担当することにした。カナディアン・パシフィック鉄道が、この町まで延びたのが一八九八年。現在は、貨物専用鉄道だが、かつては乗客も乗せていた。駅舎は残っていないが、隣のファーニーの町の駅舎は、美術館とレストランに転用されている。

ブレアモア駅の図面や古い写真も見つかった。駅舎は、縮尺二分の一で作ることにした。図面を描き、模型で細部を検討し、法的手続や材料の手配を依頼した。

黒津高行先生と私、それに大学院生五人は九月二〇日、バンクーバー経由でカルガリに到着。フィル・キャン氏の出迎えを受け、研修所のバンでクロウズネストパスへ。翌朝から早速作業に取りかかる。指導は、ゲーリー・カーペンター氏。地元の大工さんで、姓は本当にカーペンター。裁判所修復以来の友人である。彼がすでに、地面に砂利を敷き固め、土台を据えてくれていたので、壁のフレームから作り始めた。2×4（ツーバイフォー）構法は、日本の構法に比べると易しく、すぐに作業に取りかかれる。フロンティア・スピリッツとは何でも自分でやることであり、自分でできるように工夫することだとよく分かる。2×4構法も、ハンマーと鋸が使えれば作業ができる簡単な構法である。もっとも、日本とは逆に押して切る鋸は、慣れるまで使い方が難しい。黒津先生は、学内の



▲駅舎、屋根ができあがり、列車の試運転が始まる

建築技術研究センターでの作業経験が豊富で、電動工具の使い方などは抜群、学生の尊敬を一身に集める。

二日目はゲーリー氏の工場で、原寸図を引き、小屋組（屋根を支える木組み）の加工、三日目は屋根の組み立て、四日目はシダーシングル（杉の割板）による屋根葺き、五日目に庇の加工と外壁の一部の取付け、と作業は順調に進んだ。滞在期間が短かかったので、完成には至らなかったが、最後には列車の試運転もでき、充実感のある時間を過ごすことができた。

体験から学ぶ

大学での建築教育は、なかなか実物と結びつかない。私たちの大学の特長として、設計製図や実験など実物に触る機会は多い。しかし、設計から施工まで一貫して体験できるチャンスはなかなか巡ってこない。金槌を握りしめていた学生が、金槌は重力に逆らわずに振り下ろす道具だと分かるのにさしたる時間は要し

なかった。「ものづくり」は体験からしか学べない。

九月末、到着した日は気温二五度で少し汗ばむくらいの陽気。帰る日の朝起きてみたら、一面の銀世界で小雪が舞っていた。夏から一足飛びに冬である。この激しい気候の変化と同じように、一緒に作業をした学生たちも大きく変わった。最初は、英語で挨拶もできなかったのが、帰る頃にはゲーリー氏や地元の学生と作業を打ち合わせ、ニコニコと談笑するようになった。フィル氏の三人の息子たちも手伝いに来てくれた。大勢で足場の一カ所に乗ってしまい崩れ落ちることもあったが、怪我には至らなかったから、何もなかったことにしよう。

寒い冬が終わり、雪が解けると、ゲーリー氏は追加の作業を始めてくれた。駅舎の前に舞台をかねたプラットホームを造り、ピクニックベンチとテーブルも私たちのデザインに沿って製作された。樹木や芝を植えれば完成である。

七月一日は、カナダの建国記念日である。この日に、コメモラティブ・プラザと名付けられたこの公園も、開園式を迎える。地元の子どもたちの笑顔が楽しみである。

（日本工業大学）